

# ふるさとを語る

兵庫県は、5つの個性ある地域から成り立っており、多彩な人材を輩出しています。そこで、毎回、さまざまな分野で活躍中の方に「ふるさとひょうご」を語っていただいています。

今回は、テレビ東京アナウンサーの大橋未歩さんに、大久保県人会事務局長がお話を伺いました。

## 大橋 未歩

(おおはし みほ)



©テレビ東京

神戸市(須磨区)出身

1978年8月15日 神戸市生まれ

血液型・B型 星座・獅子座

出身校 神戸女学院中等部、神戸女学院高等部、上智大学法学部

2002年 テレビ東京入社

主な担当番組

「所さんの学校では教えてくれないそこんトコロ」(金曜・夜9:00~9:54)

「未来世紀ジパング」(月曜・夜10:00~10:54)

大橋さんは神戸市須磨区のご出身と伺いましたが、まず最初にふるさとのお話についてお聞かせください。

須磨寺の近くにある北須磨小学校に通っていました。学校自体が山とつながっているような所でした。ですから、学校でヤギを飼っていたり、校外学習は山の中でしたりと、いつも自然を近くに感じて過ごしていたように思います。また、学校の行き帰りには須磨寺の境内を通っていましたが、お寺の静かな空気に触れながら幼少時代を過ごせた事は、とても幸せだったと、思い出深く感じます。

実家のマンションの裏はすぐ山で、窓からは広く海が見えていました。その自然に囲まれた環境がどれだけ恵まれたものであるかというのを、都会に出てからしみじみ感じましたね。

中学、高校は神戸女学院ですね。その頃の思い出を教えてください。

今年、神戸女学院の講堂や礼拝堂など校舎建造物が、国の重要文化財に指定されたと聞きました。生徒時代を過ごしたあの校舎や天然芝が守られているのだと、とても嬉しく感じました。

神戸女学院は、キリスト教主義の学校ですので、毎朝礼拝がありました。聖句を読んで、讃美歌を歌うのですが、当時は朝眠い日などもあって、なかなかそのありがたみが分からなかったものです。しかし、社会人になって、しみじみ思い出される言葉も多く、それが今の自分を戒め、励ましてくれます。

そのほか、毎日通学に1時間20分かけて通ったこと、クラブ活動でのバスケットボール、また、制服も校則もなく生徒の自主性を尊重する学校でしたので、自分たちで試行錯誤しながらルールを作ったのも思い出深いです。

今年、阪神・淡路大震災から20年になりますが、震災時は高校生でいらっしゃったわけですね。

そうですね、震災に遭ったのは高校1年生の終わりでした。その日はたまたま電気を付けっぱなしで寝ていたので、揺れ

た瞬間の部屋の中が見えました。本棚から本が「落ちる」のではなく「水平に飛び出す」光景は今でも忘れることができません。それまで「神戸には地震が来ない」といわれていたので、あまりにも大きな揺れに、それが地震だとすぐに認識することができませんでした。何が起きているのか分からず、呆然とするうちに停電。「ああ地震なんだ」と分かった時には、動けなくなっていました。その後、父に助け出されて家族4人がリビングで地震がおさまるのを待っていたという状況でした。

そこから、被災生活が始まったのですが、水道が止まるとまずトイレに困り、近くの川に水をくみに行くことが日課になりました。実家はマンションの6階だったので、その時初めて水がこんなにも重い物だと知りました。ガスも使えず、3週間もお風呂に入れませんでした。

何より、本気で「死ぬんじゃないか。」と思った経験は、後にも先にもこの時だけです。マンションの鉄筋が軋む音を聞きながら、倒壊したらきつと死ぬと思いました。何年たってもあの時の恐怖は忘れることができません。

震災を通しての教訓、被災者の一人として伝えておきたいことはありますか。

「命が助かる寝室」を意識してもらいたいと思っています。首都直下型地震という意味で、阪神・淡路大震災の教訓は生きてくると思います。都市部の人は、狭小住宅で大型家具に囲まれて暮らしていると思いますが、私の父の場合、枕元にあつたテレビが寝ている父を飛び越えて床に落ちました。もしそれが、頭に落下していたら、父も無事ではいなかっただろうと思います。起きている時に身を守る行動は、東日本大震災などを通して日本中に周知されてきましたが、寝ている時にも地震が起きる可能性があるわけですから、寝室の家具の配置に気を配ってもらいたいと思います。

その後東京の大学に進学されましたが、それは何か理由があったのですか。

神戸はとても好きでしたが、親元を離れてみたかったのと、その頃にはアナウンサーになると決めていたので、アナウンサーを多く輩出している大学ということで、上智大学に進学しました。

アナウンサーを志された理由は何ですか。

はつきり意識したのは、中学2年生の時です。バルセロナオリンピックで競泳の岩崎恭子選手、彼女とは同じ年なので

すが、彼女が「今まで生きてきた中で一番幸せです。」とコメントするのを見て、この舞台に行ってみたいと思うようになりました。もちろん選手としては無理なので、メディアの一員として行くことを志しました。ですから入社試験でも、配属の希望は最初からスポーツ部一本でしたし、他局からもらっていた内定も、キー局のアナウンサーでなければオリンピックに行けないという理由でお断りして、テレビ東京にお世話になることに決めました。

スポーツには人間を成長させる力があります。例えば、私の弟が関西学院大学のアメリカンフットボール部の選手でしたが、ある大事な試合に怪我をして出られなかったことがありました。その時、彼が淡々としているのを不思議に思っ「悔しくないの。」と聞いたら「(スポーツは)結果がすべてだよ。」といわれたことを覚えています。実は彼は小さい頃はとても気の弱い子供だったのですが、スポーツを通して肉体的にも、精神的にも強くなり、人間的にも成長してきたのを目の当たりにしました。

だから私も、そんなオリンピックの魅力や、スポーツの持つ力を伝える仕事に携わりたいと、強く思うようになりました。**アナウンサーというお仕事を通して、一番難しいとお感じになるのはどんなことですか。**

コミュニケーションの大切さを痛感しました。実は、私は入社1年目でスポーツニュースのキャスターを、それまで務めておられたベテランアナウンサーから引き継ぐという幸運に恵まれました。ですから、入社3年目の2004年アテネオリンピックは、夢を実現させる絶好の機会として臨むことになりました。しかし、当初私は、オリンピック取材クルーのメンバーに入っていないかったです。理由は、スタッフとのコミュニケーション不足です。チームワークがとても重視される取材クルーにとつて、これはとても重要な要素なのです。

当時の私は、スポーツニュースのキャスターという仕事に対し、前任のベテランアナウンサーと同じレベルをこなさなければならぬと思ひ込み、わからないことを素直にわからないと言えず、虚勢を張ってしまっていました。周りに対する謙虚な姿勢を失い、どんどんスタッフとのコミュニケーションが薄くなっていったようです。

結果的にはその後、私にとつての幸運な巡り合わせもあって、オリンピックの取材アナウンサーに選んでいただき、夢を叶えることができたのですが、この事をきっかけに、変な

プライドは捨て、真摯に謙虚に仕事に取り組みようになつたように思います。支えてくれるスタッフがいなければ何もできないということや、コミュニケーションを図ることがいかに大切かということを痛感するいい経験になりました。**スポーツアナウンサーにとつて、オリンピックの取材アナウンサーになることは、4年に1度の憧れの役目なのですか。**

4年に1度のチャンスではないかもしれませんが。選手はまさに、人生を賭けて臨んでいるわけですし、それが報われる最高峰の舞台になるわけですから、その瞬間に立ち会えるということは、訳もなく心が揺さぶられて涙が出たり、血液が逆流するような感動を味わえる場所に行くということです。アナウンサーにとつても同じくらい得がたいチャンスです。

ですから、アテネオリンピックから帰って来たすぐその時から、次の北京にも行きたい、選手の姿を長いスパンで取材をして、次のオリンピックを迎えたいと思いました。**特に注目している競技はありますか。**

テレビ東京は卓球とともに歩んできたところがありますので、卓球には特に思い入れがあります。

ロンドンで日本の女子団体は銀メダルを取りましたが、そこに至るまでの彼女たち3人の、選手としての成長はもちろん、人間としての成長も見えてきました。チームメイト同士でのランキングの入れ替わり、怪我との戦い、勝利と敗北を通して練り広げられる成功、挫折、嫉妬。それらをどう受け止めていくかという葛藤は、彼女らスポーツ選手がぶつかる葛藤であると同時に、私たち人生の葛藤の縮図だと思えます。そして、挫折しても腐らずに努力を続けていると、必ず報われる瞬間が来る。そうした人生の縮図を見せてくれることも、スポーツが持つ魅力のひとつです。

**では、オリンピックを取材されてきて一番印象に残った瞬間というのは何ですか。**

印象に残ったという意味では、アテネオリンピックの柔道で、井上康生選手です。アテネオリンピックでは準々決勝戦で敗れました。前回のシドニーオリンピックでは全戦一本勝ちでの金メダル。アテネオリンピックでは日本選手団の主将も務め、「井上康生のオリンピック」とまで言われていたのに、まさかの敗戦を喫し、敗者復活戦でも敗退するという予想外の結果でした。私は、インタビュしようとして待っていました。敗戦のショックで立つこともできず、両脇を他の選手に支えられて、引ぎずられるように控え室に戻って行った井

上選手を見て、こんなにも残酷なことがあるのかと思いましたが。それまでの栄光から、まさに一瞬にして「天国から地獄に落ちる」光景でしたが、それまでの取材で井上選手のたゆまぬ努力を見てきただけに、それでも努力が報われない瞬間もあるのだという、残酷なシーンとして一番印象に残っています。**大橋さんは、パラリンピックにも力を入れておられますね。**

パラリンピックは、自分が脑梗塞という病気をしたことや、2012年に1年制修士課程でスポーツ科学を学んだ早稲田大学大学院に、たまたま佐藤真海さんというパラリンピック選手がいらつしやつた縁から、一緒に番組をさせていただきました。ハンディキャップを持つ選手が制限された中で、真剣に競技に取り組む姿は、胸を打たれる瞬間があります。ただ、私にはこれまでパラリンピックを取材する機会が無く、それに対しては申し訳ない思いがありましたので、今後、もしご縁があれば是非パラリンピックのキャスターとして、その魅力を伝えていきたいと思っています。

**これからの大橋さんの目標について、お話しただけですが。**今までは違つた分野になるのですが、「報道」に力を入れていきたいと思っています。これまでは、主に「スポーツ」と「バラエティー」をやってきましたが、これからは「報道」に真正面から取り組んでいきたいと思っています。「スポーツ」「バラエティー」もそれぞれに難しさがあり、例えばバラエティー番組では難壇のタレントが、それぞれの「呼吸」や「間」でお話になるのを、司会のアナウンサーがうまく調和させ、まとめ上げて一つの番組に作り上げていくことが役目で、そこが難しい所です。そうした今までに培ってきたものを、スタジオワークなどにも活かすことができればと思っています。

**最後に、東京で頑張っておられる兵庫県人に対するメッセージなどがあればお願いします。**

阪神・淡路大震災から20年になりますが、あの震災を乗り越えて神戸がここまで復興したということは、東日本を含め、全国の被災地の方にとつて「希望の光」だと思っています。あの時、みんなが漆黒の闇の中、絶望感に包まれましたが、やっぱり太陽はいつもどおり昇りましたし、ライフラインも復活しました。学校にも行けるようになりました。どんな闇でも「明けぬ夜はない」と強く感じます。あの未曾有の大震災を乗り越えた私たちは、自分自身に誇りをもって、全国の人たちの希望であり続けられるよう、これからも頑張っていきたいと思います。